

## 巻頭言

# 「支え合い」から「頼り合い」へ

日本労働者協同組合(ワーカーズコープ)連合会センター事業団 事業推進本部  
協同総合研究所 理事 玉木 信博

信州の南、天竜川が村の中心を流れる中川村に暮らして1年になる。

山梨県側の南アルプスと岐阜県側の中央アルプスに挟まれた伊那谷は、これから実りの秋へと一気に進み、地域(集落)ごとに自然の恵みに感謝する小さな祭が催される。

祭は住民の暮らしと共にあり、都会から移住した私たちも温かく迎え入れて頂き、農村の共同体に触れることができる貴重な機会でもある。

さて、一般的に農山漁村には、まだまだ共同体が息づいており、「支え合い」の文化もまだ生きていられると言われる。しかし、実際に農村に暮らしてみると、「支え合い」という言葉とは、少し感覚が違う。「支え、支えられる」というよりむしろ、「頼る、頼られる」が実感である。

私の近所に70歳代の一人暮らしの方がいる。彼は、春から夏にかけて近所の一人暮らしの高齢者の庭や田畑の草刈りに毎日出かける。自分の庭でもなければ、農地でもないし、たくさんの謝礼等をもたらしている

訳でもない。地域の人びとから頼られているのである。農村において、草刈りは何より重要な暮らしの中の仕事であり、夏になると、どこも刈払機の音が毎日鳴り止むことはない。

「支える」という言葉の主語は、支える側にあるのだが、「頼る」という言葉は、支えられる側が主語となる。だから、頼られる方は、むしろ頼る側によって、その力を発見され、認められ、依頼され、そして応答する。「頼る」は「支える」というような力強さも感じない。そうやって、他者から頼られた自己を他者を通して気づき、地域社会での自らの役割や出番が生まれてくる。しかし、東京で育った私には、この「頼る」という事が、なかなか上手くない。村の人に比べたら、あれもこれも何もできないのだから、頼りたいことは山ほどあるのに。

なぜなら、「頼る」ことも「頼られる」こともお互いが深く知りあっていなければならない。私などは、この地で生まれ育っていないのだから、自分自身の内面を意識

的に開いていく必要があるのだろう。農村で暮らしていると、暮らしの中のコミュニケーションはあらゆる場面に存在していることに気づく。それは、自宅でもあるし、田畑でもあるし、役場でもあるし、道端でもある。

例えば、哲学者の内山節氏は「農林業を考える」(「農村文化運動」1995年10月号)の中で、「伝統的な農家では、居住空間、仕事空間、接客空間は、分けられないものとして存在していたのではないか」と述べている。さらに、「かつては労働と生活は一体的に営まれていたという言われ方がされるが、忘れてはならないことはここに接客という面がふくまれていること」であると。ここで言う、「接客空間」とは、家屋であり、農地であり、山林であり、「接客」とは村人

のコミュニケーション的なものとしている。

私自身が、都市と農村の暮らしを比較したとき、最も実感としてあるのは、この対話(関わり)を生み出す具体的な場の多様性である。こうした場が多くあるというのは、人を一面的にとらえるのでなく、多面的に感じられることにある。

このことは、協同労働の定着と深化に、ひとつのヒントになるかもしれない。事業を通じた職場だけでは感じることのできない他者の内面を知るには、主体者として関わる場を多様につくることが重要ではないだろうか。それは翻って仕事や地域との関係性においても、きっとお互いを受け止め合える関係性を育む。包摂力のある職場とは、そんなふうにして少しずつ形づくられるのだろうと思う。

特集

## 支え合う都市と農村の協同実践

本特集では、「支え合う都市と農村の協同実践」題して、これまで都市が成長することが農山漁村も豊かになるのだという方向の限界に対して、どのように都市と農村が支え合いながら新しい社会を展望できるかを考えたいと思います。とくに、3.11は、私たちがどのような関係性の上で生きているのかということをおぼろげに考え直す契機であったと思います。

こうした取り組みの先進的な実践としては、「田園回帰」にみられるように若者が地元や新たな「ふるさと」を求めていく動きが大きな流れとなって表れています。また、行政においても「地方創生」の名のもとに都市・農村の共生対流が進められています

この背景には、都市部においては2008年のリーマンショック以降、社会的困難を抱えている人の急増が社会問題として噴出しました。こうした労働市場からの長期的な排除は人間の生存を脅かすだけでなく、「生きづら」といわれるような人として生きていく力を剥奪しています。

また、農山漁村では人口流出による少子化と地域産業を担ってきた人々の高齢化によって次世代の担い手の育成が大きな課題となっています。とくに、地場産業の衰退による働く場の減少は深刻な問題です。

しかしながら、地域とともに生きてきた高齢者の持つ知恵や技術は私たちが生きていくためのヒントを多くもっていると考えるべきではないでしょうか。こうしたことを、次世代が引き継いでいく可能性はないのでしょうか。例えば、都市の社会的困難を抱えている人が農作業・漁業体験を通じて自然と触れ合うことにより元気になり、こうした技術を教える高齢者はみずからの力を発揮する場ができるといったお互いに相乗効果を生み出しています。とくに、都市と農村の交流を「農・食」と「福祉」の視点をむすぶことによって世代を超えた関係性を築く実践がうまれてきています。

そこで、特集では農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一さんから「地域づくりの主体者として～協同組の可能性と課題～」(総会記念講演より)をご寄稿いただきました。そこでは、現在の日本農政の課題を明らかにするとともに「農的社会」の創造の担い手をどのように考えたらよいかを明示しています。

また、実践からは岩手県陸前高田市での森の前地区都市農村共生・対流推進協議会の取

り組みをご報告いただきました。ここでは、仮設に住む高齢者の居場所づくりをおこないながら生きがいややりがいを生み出しています。取り組みは、それだけにとどまらず、仙台や東京とのツアーを通して地域の人々が役割をもって活動したり、まちの良さをツアー参加者に伝えたり、特産品や伝統料理を通して都市部との交流を実現しています。

さらに、山田地域都市農村交流協議会からは富山県の山田村の地域活性化についての実践をよせていただきました。2005年の合併以降、人口減少や村の代表がいなくなったことがきっかけとなり自分たちの地域は自分たちで守っていく活動を続けています。こうした取り組みに、ワーカーズコープがメンバーの一員として介護の初任者研修を開催するなど福祉の担い手として力を発揮しています。